

編集後記：以前からお知らせしておりました通り、本誌は基本として電磁的方法による配布に移行し、原稿の投稿も原則的に電子投稿システムを通じてとなりました。本誌への投稿をお考えの会員の皆様には、カラー印刷料の廃止など論文内容の充実や利便性の向上につながるものと考えております。皆様のご協力をお願いいたします。

この機会に、本誌の電子化、あるいは気象学会のDX化の歴史について参考となる本誌の過去記事を探ってみました。「天気」1989年36巻9号には、学会だよりに「気象学会パソコン通信（MSJ BBS）開局のお知らせ」が掲載されております。気象雑誌の原稿受取と気象学会員の情報交換を目的としています。これが学会のDX化の先駆ではないでしょうか。当時まだパソコン本体が高価だったこともあり、私としてはパソコン通信そのものに馴染みがないためこのシステムが実際どのようなものだったのかは判りません。なお「天気」1987年34巻3号によれば、GOESなどの衛星観測に関わる情報発信手段として、アメリカのNOAA/NESDISがパソコン通信を利用したサービスの試験運用を開始したとあります。気象関係の分野でもパソコ

ン通信の利用拡大が図られていた時期と言えるでしょう。

その後、「天気」1995年42巻6号から数号にわたり、「気象学におけるインターネット」という解説シリーズが本誌に掲載されました。この年以降、年末のWindows95発売などと相まって日本でのインターネット利用が急速に普及したことを鑑みると、これらの記事は絶妙のタイミングで掲載されたものと思います。記事の内容はインターネットについての一般的、基本的な説明から始まっており、WWWや電子メールと並んでNetnewsやgopherにも言及されています。そして1996年、日本気象学会のWWWサイトが開設されました（「日本気象学会ホームページ開設のお知らせ」1996年43巻4号）。それに置き換わる形で、前述のパソコン通信局は1997年末に廃止されています。「天気」の電子投稿システムは2014年に試験運用が始まり（61巻8号の編集委員会だより）、翌年本格運用となっています。

情報通信技術の急激な発展に伴う社会の変化は今後も続くように思います。是非ともかくそれに追いついていくためには「天気」においても様々な変革を続けていくことになるでしょう。

（石田春磨）